



イリアンジャヤ (インドネシア領ニューギニア)

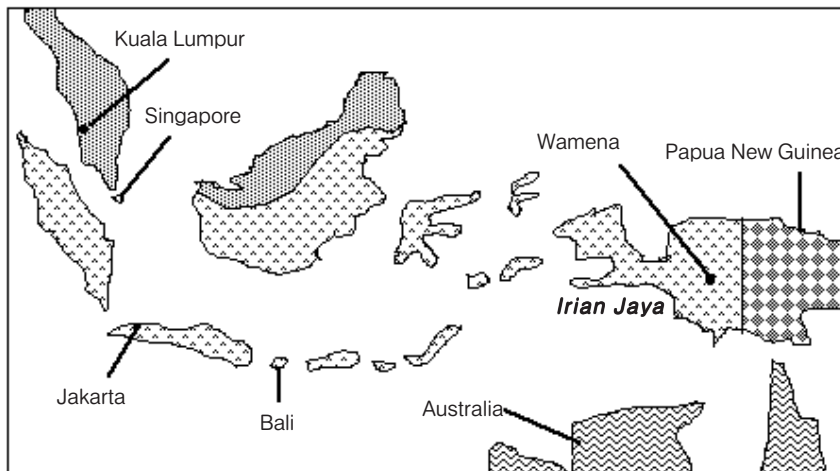
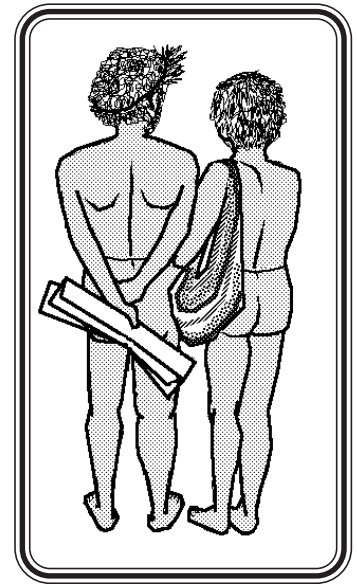
裸族との生活体験記-その1

「すごい!!」の一言でした。何がすごいかって、それは一言では言えないほどたくさんのごすごごだったです。

例えば、朝に散歩しようとホテルを出て最初に目についたものがこれ。普通にTシャツやズボンを身につけている人々に混じって、裸同然の人々もまた何気なくたくさんいます。すごいでしょ? 正面がどうなっているかは、後のお楽しみにして、とりあえず、大まかなところから・・・

10月28日～11月5日まで、インドネシア領ニューギニアを旅行していました。裸族に会えたのは、10月31日～11月3日で、その前後は移動に費やされました。飛行機の乗り換えの間の待ち時間が無いとしても片道11時間で、日本へ帰るよりも遠いんです。インドネシア領ニューギニアは、イリアンジャヤと呼ばれ、その中のワメナという町に3泊4日の日程で滞在しました。

この辺りは、4000～5000mの高峰もある山岳地帯。ここに住む人たち



を、民族学では山地パプア人と呼ぶのだそうです。ワメナは、その山間に開けた盆地にある町で、高度1600m。日中は暑いのですが、夜はぐっと気温が下がって15 以下になるところです。裸族の村は、高度3000m以上の所にもあるとのことでした。

た。

この山地パプア人が発見されたのは、1930年代になってからだそうです。(そういえば、子供の頃一昭和40年代一牛山純一の「素晴らしい世界旅行」というテレビ番組をよく見ていましたが、それで見たような記憶があります。) それまでは、石の包丁、石ナイフ、石斧といった石器だけに頼った原始時代の生活をごく最近まで続けてきた人々です。

これまで、首狩り族だの首長族だのたくさんの民族を見てきましたが、これほど衝撃があった民族はありませんでした。事前にいろいろ本を読んだり、ビデオを見たりしてから行ったのですが、それでも実際見たときの驚きと感動はとても大きいものでした。読んだ本の中で一番面白く、ぜひ皆さんにも推薦したくなる本が「ニューギニア高地人」(本多勝一・朝日新聞社・380円)です。本多勝一さんは、私が生まれた頃にこの地を訪れて、山地パプア人の部落に34日間住み込んだ人です。この本は、そこで体験した原住民との生活をまとめたものです。次のページから、詳しく報告しますね。



イリアンジャヤ (インドネシア領ニューギニア)

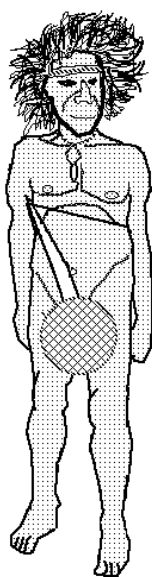
裸族との生活体験記-その2

私たちが滞在したワメナで見ることのできる裸族は、ダニ族(一番この付近に多い)・ラニ族・ヤリ族の3種族。2万年以上の間、全裸に近いスタイルで暮らした来た裸族です。

インドネシア政府は1970~80年代にかけて「国民は服を着なければならない」と衣服を無料で配り強制的に着せようとしたが、失敗に終わり、完全に裸をやめさせることはできなかったそうです。しかし、キリスト教会の強い指導や情報化などで、裸族でも服を着る人が急速にここ数年で増えたのだそうです。この付近の小学生の90%以上が日常的に服を着ていると言われていています。来世紀初めには、「裸の人たち」は永遠に姿を消すかもしれないとも言われています。とはいえ、今は、まだいます。以前ほどではないにしても、結構そこ、ここに・・・

ワメナの飛行場からホテルまでわずか1km。一見、田舎の小さな町です。町場に住んでいる人も、かつての裸族が多く、肌が黒く、髪はちりちりに縮れてアフリカ系の黒人ともまた違った顔つきです。体格はあまり大きくないようです。ほとんどの人は、靴は履いていないけれど、服は着ています。その中に、裸の男性も何人が、てくてく歩いています。1割もいないのかもしれませんが、何せ目立つ格好です。後ろ姿は全くの裸同然。前から見ると、まあ、ほとんど全裸に近いのですが、体の中心の辺りに、によいっ!とつけているものが唯一、着ているといえるものです。これを、ダニ語で“コテカ”と呼ぶそうです。

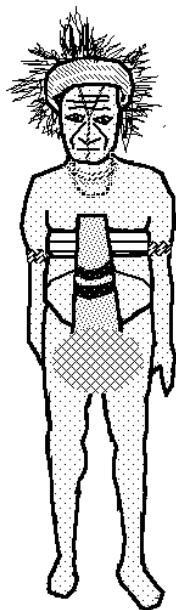
“コテカ”の形は、ダニ族、ラニ族、ヤリ族それぞれに特徴があります。



ダニ族は、細いのが特徴。

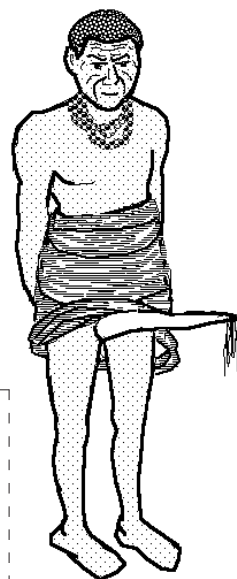
ラニ族は太いのが特徴。

この二人のかぶりものは、毛がたっぷりの帽子状。



ヤリ族は、ダニ族と同じなんだけど、竹のわっかをいっぱい重ねてスカート状にしている。

首輪やかぶりものに凝っている人が多い。コテカの先に何かくっつけて飾っている人もいる。



また、その持ち主によって少しずつ長かったり曲がっていたりと、いろいろ個性があります。材料はひょうたん的一种を乾燥させたものだそうです。自分で栽培して、自分の好みの形になるよう添木をするなどして形を作るのだそうです。

女性の姿も、また一風変わっているのですが、それは次のページで・・・



イリアンジャヤ (インドネシア領ニューギニア) 裸族との生活体験記—その3

すぐ近くの市場に行ってみました。

裸の人は1割もいませんが、何せ目立ちます。服を着ずに、裸で市場に来ている人達は、何となくぶらぶらしていると言った風でした。女性で、裸族の伝統的スタイル(上半身裸に腰みの)をしている人はほとんど見かけませんでした。売り手は圧倒的に女性でした。

女性は、たいていTシャツにスカート。そして、頭に大きな袋をぶら下げています。その袋が何重にも頭にかかっているのが普通。朝起きてスカートをはくのと同じように、頭に袋を引っかけるようです。これに何でもかんでも入れて運びます。たとえ全ての袋が空っぽでも、いっつも頭に引っかけています。このおばさんは、頭に布を巻いてからぶら下げていました。一番上の袋には芋がごろごろいっぱい入っています。その下いくつかは空っぽで、袋の形を整えるためか、石だけ入っています。そして、一番下は、なんと赤ちゃんが裸のまま入っていました。



毎朝、野菜などを自分の頭にぶら下げ、ほとんどの人は歩いてここまで来るのですから、量はしれたものです。それぞれの売場のスペースはせいぜい1~2m²。売場にちょちょちょっと野菜などを並べて、後はその前にちょっこんとすわって待つだけ。隣の人とおしゃべりをしていたり、子供の頭のシラミ取りをしていたり。頭に袋を何重にもかけたままうつむいて座っていられると、一見、荷物かと思う姿です。

気が付いて、ぎょっとしたものをもう一つ。赤ちゃんを連れている女性が多く、おっぱいをあげている姿はよく目にしましたが・・・この女性が抱っこしているものはちょっと違うんですよ・・・子豚です。ワメナに来る前、読んだ本では、ダニ族の女性は、我が子を世話する以上に豚の世話をよくし、母豚が死んだりすれば、代わりに自分の乳を与えると書いてありました。まさにその通り。知ってはいたけど、実際目になると、「うわあ。本当なんだあ。」と感激。子豚は子豚で、すっかり赤ちゃんになりきっていて、あやされながら気持ちよさそうに目を閉じ、膝の上で寝ています・・・でも、ぴょんと上に伸びた四本の足が、何かおかしかったです。



もう一つ、ぎょっとしたこと。市場の通路のあちらこちらに、赤い血のようなものが落ちていました。よく見ていると、ぺっぺっと赤い血を吐く人がいるんです。それが一人だけでなく、何人も・・・何も知識がない人が見たら、本当に驚くと思います。集団で、悪い病気にかかっているのではないかしらと。私は、本で読んだことがあったのですが、それだと分かりましたが、それでも、不気味で気持ちがいいものではありません。ピンノウジュという赤い木の実を、くちやくちやくかんで、赤く染まった唾をぺっぺっと吐いているんです。どうしてそうするのかは知りませんが、ガイドさんは、タバコみたいなものだと言っていました。土地によっては、女の人が口紅として唇に塗っているところもありました。

タバコもありますが、乾燥させたタバコの葉を、タバコではない普通の木の葉の上にちょっとおいて、くるくるっと巻くだけ。吸ってみた人の話では、タバコと言うより葉っぱくさいとか・・・

茹でたピーナッツも売っていました。日本のものよりずっと小振りですが、なかなかおいしかったです。ちょっと生っぽかたけど・・・

PDF版第3-2号に続きます。

次へいく